

---

月 刊

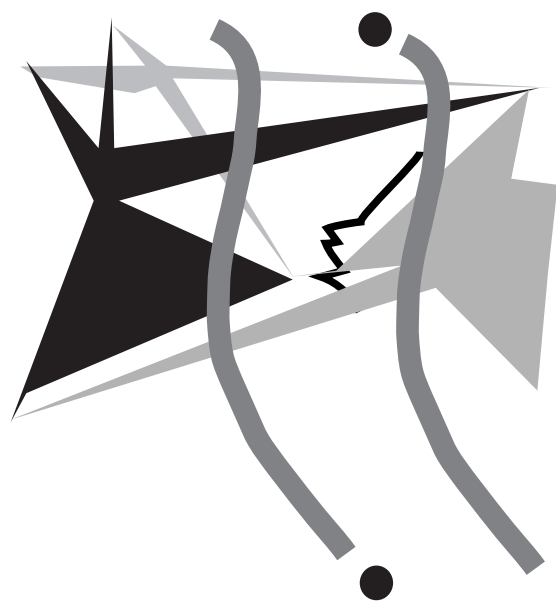
---

# MéLange

---

vol.90

---



---

2014.03.23

詩と評論

---

月刊

「Mélanges」 VOL.90

2014/03/23

月刊

「Mélanges」編集部

金魚……………	今野和代	3
受肉……………	岩脇リーベル豊美	4
どぶの底にボクがいる／屋根裏……………	中嶋康雄	5
この涙はなんでしょうか／探して……………	川田あひる	6
父との時間……………	にしもとめぐみ	8
折紙の差出人について……………	千田草介	9
川柳連作 クリミア・ポリリズム……………	情野千里	10
連想ゲーム9……………	野口裕	11
ε:ソ(エール)……………	月村香	15
緑の卵……………	福田知子	16
西日暮里……………	上野都	17
裂け開け……………	有時秀記	18
それはうたかたの二月……………	大橋愛由等	19
窓のある部屋……………	中堂けいこ	20
既視感 <small>デジャヴ</small> の風景……………	高谷和幸	21
帰郷……………	寺岡良信	22
パラダイス……………	富哲世	23
<b>エッセイ</b>		
△詩人通りより▽13 「略奪芸術のこと」……………	岩脇リーベル豊美	12
連載第2回／HANAだより01 △全体主義とはなにかーアレント▽……………	中堂けいこ	14
△神戸詞あしび▽79 「〈口説〉に見出す徳之島の歌の魅力」……………	大橋愛由等	24

編集部だより★11／第90回「Mélange」読書会の発表者は、富哲世氏と大橋愛由等。テーマは「ハイデッガーとヘルダーリン その2」。前回の神尾和寿氏の発表に刺激をうけて、「Mélange」読書会の常連メンバーである富氏と大橋が引き続き、それぞれの関心領域から発表をします。／わたしの発表はどうしてヘルダーリンはギリシアに惹かれたのかを、彼の詩や論考をひもといて考察します。一度も訪れることのなかったギリシアは、詩人ヘルダーリンにとって、原初(アルケー)が担保された詩郷であり、彼が生きたヨーロッパやドイツを照らしだす替えがたい鏡面であったのかもしれないです。(大橋記)

◆金魚

今野和代

ピイ  
ピカピカピ  
金魚の眼が光る  
金魚の詩を読んできると  
わたし 金魚になつてた  
同居人に訴えるのだけど  
鼻びらがひくひく動くだけ  
プクンポアン声は泡ぶくになる  
いつのまにかびっしり金色の鱗が  
全身を覆いお腹がぼっこり膨らんで  
たちまち鰓がはつてきて呼吸しはじめ  
尾先がねろりひらりもう私はランチュウ金魚になつて  
胸鱗と尾心でバランスをとつて水中を遊泳しはじめている  
「一部では……クライナ南部クリミア……半島の  
……バクラバで……ロシア陸……軍が……  
侵攻を……開始……という情報も……出て……来ました……  
一部では……クリミア南岸……ヤールタにも……」  
明滅するテレビのずつとむこうから  
今にも戦争が始まりそうな緊迫した  
早口の言葉で途切れ途切れに男や女の

複数の声が聞こえてきた  
クリミア ヤールタ！  
私は一日だつて幸せだったことはないし、今も  
これからも決して幸せになりっこない  
自身を罪の女だと男の胸で泣いた  
チエーホフの物語の旅するアンナが  
泣きはらした眼を毅然とあげて  
歩いていく海岸沿いの町だ  
ホテルのテーブルには  
首の欠けた騎馬武者の像がついた  
埃で灰色になつたインク壺が静まりかえつて  
物憂く点滅する燈台の灯が揺れる窓ガラス  
そのむこうからしきりにする男の声  
旅は始まつたばかりさ  
こんな囲いなんかすぐに抜け出せるさ  
もうすこしのシンボウ  
俺たちは  
まだその先の  
はるかにフクザツな  
コンナンなとびつきりの  
旅に出るのだよ  
ピイピカピイ  
金魚の目が光る  
藻が揺れる  
ピイピカ  
ピイ

## ◆受肉

岩脇リーベル豊美

言葉になる前のさかなはナイフだった  
鱗を煌かせながら翻るナイフだった  
肉を受けて言葉は人間になった  
人間は白い腹を素手で掴んだ  
静思の水底で還る言葉はひとつ  
問い掛けに必要な答えはなかった  
離魂病の論理をもち出した  
それでも過渡をうまく説明できなかった  
冷たい宇宙の破片に悲観していた  
彼女とそれは支えあって矛盾した  
かつて通ったことのある小径だった  
森羅万象をありのままに好きになりたかった  
肉をナイフで切り取った  
ふつうに腐りたいと思う一瞬だった

## ◆どぶの底にボクはいる

中嶋康雄

閉じられれば  
窮屈だが楽だ  
馴染みの臭いと  
馴染みの毒がある  
ずっとずっとそこにいる  
いれるものならば  
ずっとずっと  
どぶの底にボクはいる  
いろんな汚物がたまり  
親しみが  
黴に具現化し  
ボクの体を覆って  
赤や黄や青や  
なんだかわけのわからない色やの  
和毛の胞子が  
ニコニコ笑いながら  
ボクの体  
食い散らかして  
ボクもほんとニコニコ笑いながら  
体を常時掻き巻く  
血や膿がほんとニコニコ出てきて  
笑いながら凝固している  
そのあたたかさが  
下世話な永遠だ

## ◆屋根裏

中嶋康雄

去年から張られたクモの巣に  
去年からひっかかったイエバエ  
ハエは  
模様が崩れ  
灰色の  
のっぺらぼうになって  
笑っているようだ  
ちりちりと空気全体が  
ハエを抱きしめている  
紙のように乾ききった薄暗がり  
クモは  
今もハエを食べようとしている  
食べる距離を縮められないクモの体は  
ハエよりも乾いている  
埃だらけの新聞紙が  
また黄ばんでゆく

## ◆この涙はなんでしようか

川田あひる

秋晴れの  
いい天気です  
終わったミムラスが  
一輪だけ  
開こうとしています  
見上げる父の岸辺が  
頭上から  
舞めき  
押し寄せます。

父は  
「戦局の悪化による徴集年齢の繰り下げで  
昭和19年9月15日  
満18歳11か月で徴集現役兵として37連隊に入営し  
即日  
68師団58旅団独立歩兵115大隊に転属され」  
に始まる  
従軍記録を  
晩年に書き遺しました  
わたしはいまそれを読んでいます

初年兵の父が真つ先に受けた  
基本教育とはなんだったのでしょうか  
内容が書いてありません  
書けなかったのでしょうか

父は  
生きてくられた中国人を的に  
突進し  
牛蒡剣で突き刺したのでしょうか  
父は  
正月元旦  
酔っぱらい  
戦友ヨコヤマの  
思い出を  
ひとりぼっちで  
しゃべって  
うなだれて  
ねむりました

いま流す私の涙はなんでしようか  
わたしのこの首筋の痛みの意味はなんでしようか  
胸抉られる苦しみはなんでしようか  
わたしが  
受け継ぐ使命はなんでしようか  
父の記録

ワープロ印字の最後に手書きで  
(戦死・戦傷死約3000人  
戦病死約6500人  
不明約2000人  
合計9800人戦没  
師団定員15000人(丁編成師団) 昭和17年  
5 昭和21年6月)  
と記されています。  
父は

誰に何を  
伝えようとしたのでしょうか  
淡々と記されたかに見えるその脳裏に  
甦り  
迫ったものは  
なんだったのでしょうか

正月元旦  
酔っぱらい  
うなだれた父を  
ひとりぼっちにさせたわたしが  
いま  
裁かれています  
父たちの  
たましいが  
安らかにと  
拜むことをどうか  
赦してください

## ◆探して

川田あひる

くるおしい  
唯一を  
探して  
夜の  
ファスナーを  
開ける  
無い  
ない！  
ない！  
なかつた首筋にまつわる  
髪  
そして  
ファスナーは  
閉じられ  
朝日の  
カーテンがひかれる  
夜宙が  
手のひらほど  
のぞいて  
探した  
痕跡が  
幾層も層をなした  
懐かしの  
貌に  
また  
一層。

## ◆父との時間

にしもとめぐみ

長い坂を上り詰めると  
父のホームがある

ドアを開けると

ひとりの老人が座っている

口元は歯もまばら

セーターはあちこちほころびて

衣服がその人を皮膚のように包んで馴染んでしまっている

口を聞くのも怖くて厳しかった面影は消えて

柔らかい眼差しで迎えてくれた

楽しい話題もなく言葉少ない私に

父は昔の話をたくさん語り出す

一本目のワインが空になった

父の頬がピンク色に染まる

低い静かな父の昔語り

私の翳りを帯びた心持ちも軽くなる

思わず二本目のワインを買いに出かけた

たくさんの会話が流れた

父に会った

八十八歳の誕生日を祝った日

嬉しい一日だった

## ◆折紙の差出人について

千田草介

見直すごとに文脈が二転三転する文言の書かれた八つ折りの紙がいやこれは紙ではなく神なのですお告げが載っているのですから言葉はすなわちそれイコール神なのですからけつしてこれでお尻を拭いたりしてはいけませんと注意書きがあるのだがまばたきするとそれは痴漢のたぐいもしくは凶悪な性犯罪におよぶ不審者が出没するかから護身のために三十八口径の拳銃を所持できるよう法改正を実現しましょうという公共広告に変じてミス&コックス兄弟社という武器製造業者の日本支社長である安倍川太郎という人物の妙なつくり笑いをうかべた顔写真とサインがサブリミナル効果をおよぼすような明滅をくりかえすのであるが抱き合わせの裏面広告は30分8000円40分12000円50分15000円うんぬんという性衝動を喚起させる数字の羅列と爆撃機の機首に描かれたような裸の女のフォルムでありそれが街頭で若者が配るポケットティッシュならば涙をかむか尻を拭くかにしか使い道がないではないかと思つてよく見たところ熊野牛王宝印が捺されてあるお札であるから一遍上人のような遊行僧が誰彼なく配つてまわつたものであるかもしれず粗略には扱えぬさて困つたものだと持て余し思案の果てに紙飛行機に折り直して「神風」と書きこみ神の御意志のままにと空に放つ。

◆ 川柳連作

## クリミア・ポリリズム

情野千里

嫌韓論と遇う啓蟄のダンゴムシ

乱高下する割烹着の評価額

サブ・ローザなる横田夫妻のまじひまじ

サムライゴーチン丁髷切って髭剃って

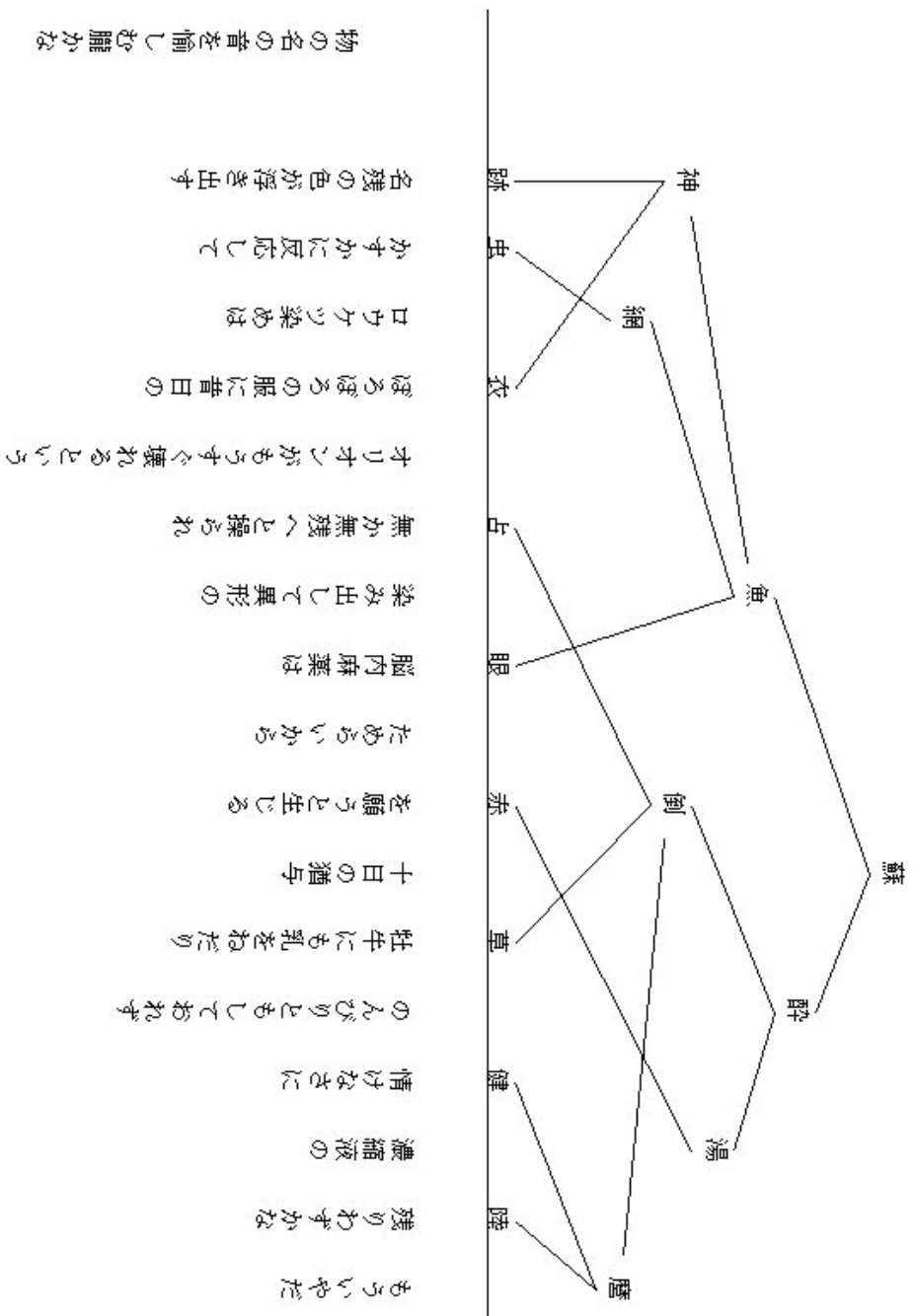
影武者の現代音楽が何方付かず

マレーシア機の乗客数多さくら寒

ウクライナはどうなる急須の蓋欠ける

扁桃の花咲き死者の不養生

## ◆ 連想ゲーム9



野口 裕

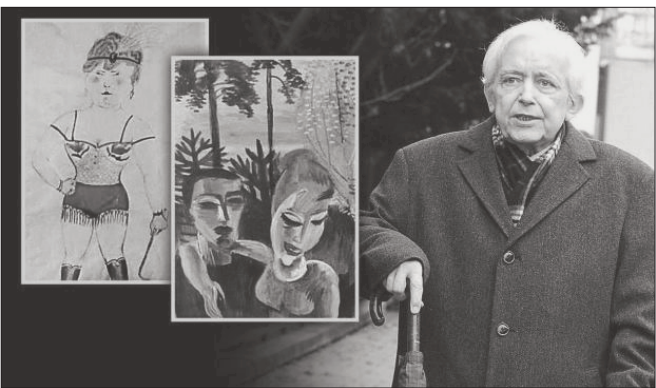
昨年十一月初旬のことになるが、Raubkunst(略奪芸術)という見出しの裏に驚愕するとともに、一種の蔑みとも愉快とも区別のつかない期待をもって新聞記事を追った芸術愛好家は、バイエルン州のみではなく、ドイツ国内外でも、相当数にのぼったと思う。それが先日から再燃し、というよりも、むしろ当初予想された質、量を超えてさらに名前を聞くだけでも驚くような作品群が発見され、今朝もラジオのニュースで耳にしたり、拙稿執筆現在も各新聞社のオンラインには刻々と進展が報告されているので、急遽この話題を持ち上げてみる。コルネリウス・グルリット(一九三二年生)が画商の父ヒルデブラント・グルリット(二八九五～一九五六)より譲り受けた二二八〇作品にも及ぶ絵画(当初は一五〇〇とも伝えられた)を隠し所有していたことが暴露された「Münchener Kunstfund ミュンヘン美術品発覚」と呼ばれるようになった一連の出来事である。しばらく翳を潜めていたようであるが、ツァイト紙などを斜めに読んだだけでも、芸術史的観点からだけではなく、法的にも行政的にも心情的にもその後の展開がわかる。

Raubとは略奪とか強奪という意味の名詞で、シラーの『盗賊』も Rauber であり Raubehe(略奪婚)や Raubtier(肉食獣)という組み合わせがすぐに思い浮かぶが、Raubkunst(略奪芸術)という言葉の定義はドイツ語の一般的辞書ドゥーデンに「不法に(特にナチ政権下に主としてユダヤ人の所有から)入手された芸術作品および芸術作品の全体」と説明されているほど、普通名詞化している。ヴァイトゲンシュタインの遊びを思つて、このように用語が成り立つのだと感心しているが、今はさほど関連ないかもしれない。ピカ

ソ、シャガール、アンリ・マチス、オットー・ディックス、フランツ・マルクなどの、ナチ政権によって「頽廢芸術」と名付けられ、画商の父ヒルデブラント自身が、一九四五年の空爆で焼失したと語っていた紛失絵画がこれほど多数発見されたのであるから、芸術史を塗り替えるといつてもいい出来事であろう。

父のヒルデブラントはナチスに協力した「退廃芸術」のアーティスト・ディーラーとして知られているが、彼の母方の祖母がユダヤ人であるということや、手がけた現代芸術作品が理解されず当時勤務していた美術館を解雇されたにもかかわらず、一九三三年にはナチスの宣伝相ゲッペルスに認められ、リンツにあったヒトラー美術館のディーラーに就任し、また戦後にもパリやアメリカで画商として活動しているのである。一九三三年と言えば、NSDAP 国家社会主義ドイツ労働者党が独裁体制を敷き、「非ドイツ精神」に対して焚書が行われた年でもある。学者や富裕層をはじめ、ユダヤ系の人たちが国外に亡命するに際して、所有品を売り払っていたという年である。グルリットの押収品の中で二〇〇点余は国際保証書があるので、一九三〇年代と一九四〇年代にナチ政権がユダヤ人収集家や画商から没収、あるいは二東三文で買い入れた作品を再び安価で売り払ったものと推定されているが、では何故自らユダヤ人の血を引くコルネリウス・グルリットが所有にこだわるのか、問いたくなる。

これらを所持していた息子のコルネリウスは現在八〇歳を超え、定期的に相続した絵画を売却して生活費に当てて、五〇年以上もミュンヘンはシューパービングの自宅で孤独に隠



ドイツの新聞に掲載されたコルネリウス・グルリットと「略奪芸術」

遁生活をしていた。二〇一一年春、すでに、税務当局が脱税疑惑で彼の自宅を捜索する過程で巨匠の絵画や版画などが大量に見つかり報道されている。腐った食物と数十年前の缶詰のあき缶のゴミが山のように積もった暗い部屋に巨匠の芸術品が保管されていたとも言われ、その謎のような人物像も騒がれたが、現在の写真を見る限りでは、吹っ切れたような印象すら受ける。それはさておき、ドイツ税務当局はこのような発見事実を直ちに公開せずに美術品を秘密倉庫に保管する一方で、絵画の元の所有者を追跡する作業を進めていたらしい。二年以上経過して、それをすっぱ抜いたのが昨年十一月の大衆紙フオークスの記事だった。

数週後のシュピエール誌のインタビューでコルネリウス・グルリットは、父から全作品を合法的に相続しており、自主的に返却することは不本意だと語っているし、公平で法的に正当な解決を望むとも言っている。全くの私見だが、「略奪芸術」

ではないと言いたいのかもしれない。

美術専門家たちは、米国のイスラエルの外交官らと、論議の的になっていく芸術作品の所有権を特定するドイツの手続きが緩慢で、返還を管轄する法的な枠組みが弱いと批判していた。ドイツの美術館自身も収集品を調査対象にすることに消極的で、数人の学術員が視ているとの噂もあったほどだ。そのような批判を受けてか、バイエルン州は今年年頭、二月に連邦評議会に提示されるべき美術品返還法の草案を発表したばかりだった。それは、ナチ芸術政策による犠牲者の正当な相続人の返還要求が、将来的に、三〇年後に自動的に失効することはなく、その条件は、現在の所有者が「不誠実」であるということ、つまり、所謂「略奪芸術」の所有者が、相続時に少なくとも、その作品が譲渡人に合法的に属していたかという証拠の提示が必要である、というものである。

そうしたなか、つい先の二月一日、ミュンヘンの自宅のみならず、ザルツブルグの別荘でも六〇作品のモネ、ルノワール、ピカソ等が新たに発見されたというので、所有および権限の議論が再燃するのは仕方ない。「グルリットの委任により、これらの作品は専門家によって万が一の略奪疑惑についても検討されるが、初見にもとづく事前評価によると、このような疑いは立証されていない」と彼の弁護士が語ったところまで読んだ。どうなるのだろうか。半世紀以上も徹見い(であろう)部屋、もしくは押収倉庫から出て、(破損しないくらいの)照明に当たればいいと思うのだが。



## 全体主義とは何かーアレント

前回取り上げた映画「ハンナ・アレント」の主演女優バルバラ・スコヴァの声がいまだに耳の奥で響いている。そのうちになんだかアレントの周囲をうろついてみたくなった。かの名著『全体主義の起源』にふれてみる。全三巻「反ユダヤ主義」「帝国主義」「全体主義」いずれも翻訳で三百頁をこえる大著である。ナチス崩壊後の一九五一年に出版された。

西欧では一九世紀に近代的国民国家(Nation-State)が成立し民族の自意識が高まるが、同時にこの帝国主義と法治国家の発達にあいまって、土着性の無い流民や亡命者はその国の法の適用はされるが権利から除外されるという状態に置かれた。古来西欧ではポグロムの犠牲に強いられるユダヤ民族は近代に入って棄教混血が進みドイツでは少数数になりつつあったのだが、第一次大戦後の廃墟に姿を現したのは「反ユダヤ主義」を標榜するナチス党であった。

ナチスの全体主義運動はアーリア人によるアーリア人の千年王国という首尾一貫した虚構世界の構築をめざすことだという。それは現実世界の不安や緊張に強いられた大衆が逃げ込むのうつつの虚構物語であった。この大衆(暴徒化したモップとアレントは呼ぶ)を取り込んでナチス党は政権を奪取する。

第三巻ではナチスの全体主義運動とソ連のスターリン体制を対比させながら、二つは体制と構造は違っても運動の方向性と手段において本質的に同じ全体主義運動であるとアレントは言う。独裁主権を握ったナチスは全的 세계支配を目標に掲げ、暴力と恐怖で社会を分断し生活の中にまで運動を浸透させるやり方、つまり秘密警察の網を広げ人と人との間を断ち切っていく方法で支配していく。

アレントは残された文献資料や証言をもとに、あらゆる

## H A N N A 便り 02

人間行動の様相を解釈し叙述を進める。論法が直線的にならず雑多に入り組んでいるため、同じような論証を別の分析法をもって幾度も繰り返すのだ。この叩き込むような執拗さにアレントの抑制された憤怒を思わずにいられない。人類史上例を見ない民族浄化、恐怖とテロルによる政治イデオロギーはその起源から解明されなくてはならなかった。

私のもつと陰惨な暗い内容を予想していたが、アレントの熱のこもった叙述がどのように入り組んでいようとも暴き立てる勢いに押されて読み進むことができ

た。

強制収容所および絶滅収容所の本当の恐ろしさは、被収容者がたとい生き残っているとしても、死んだ人間以上に生者の世界から切離されている――なぜならテロルによって忘却が強いられているから――

人類愛や自由平等人権など人間としての善的な感情を一切否定し金髪碧眼の男子だけが存在するとは一体どのような王国だろう。人が人と扱われず罪も無く絶滅収容所のガス室で数百万の人々が殺されたのは現実起こったことである。

何故、今アレントなのか？ 全体主義の萌芽は現在もどこかで芽吹いているかもしれない。アレントは「だからこうしろ」という教示はしない。「で、あなたならどうするか？ 自分で考えよ」。考え続けることは人を強靱にする。アレントの魅力はここにある。スコヴァの声が聞こえるうちにアレントの足元くらいは照らしてみたいが。

### ◆ ε : γ (エール)

月村香

ことばは単純でほらここにすでに何も隠されていらないのだがリズムがね単語の中のγの音のように不思議な帳面は書かれ山程積まれてもまだ手は止まらない t a b a s c o という発音ができなかったわたしは大皿の pasta料理にホットオイルを出され仕方なくかけたあなたの前でそしてエビのカクテルも食べたγの発音のように初めて見る鉛筆書きのハガキはあなた宛だったけどわたし気に入ったからポストから取ってそのままもらったなぜ詩を書いているときにフランス語が気になってフランス語を讀んでいると詩にかじりつくの重ねられた睡眠のちに蝶がすなわちページが

中堂けいこ



## ◆緑の卵

福田知子

緑の卵が生まれた 朝  
ふらんねるのシャツを着て出かける  
曲芸の雲が大道芸人を呼び込むと  
正月の飾りを焚くとんどの煙が神社からあがる  
だれもない しんとした社の杜  
仕事場に向かう大正時代の人びと  
想い出を呼びよせる 人びと  
京の如月――  
ふうわり立ち昇る饅頭屋の湯けむり 白く  
椋鳥啼いて  
雨は雪にかわり  
広角レンズに拡げられた河原を埋める  
鳩は白い羽をひろげる  
電線に鳥がやってきては

白に染まる  
白い鳩も黒い鳥も白い鳥になる その数 数十羽！  
氷に閉ざされた河畔から無音の風が立つ  
京の如月――  
朝のサッシに降りる霜 白く

はあはあ吐く息  
白いひとは路地を走り抜ける  
狒犬は笑いながらあとを追う  
あ、うんの呼吸であとを追う  
路地の向こう  
ゆき絶えたひかりが静かに微熱を結ぶ頃  
雪は雨に変わり  
けむりも ひとつも 鳩も 鳥も 霜も ゆき暮れ ゆき濡れ  
ひたひた ひた濡れる ひかり ひしひし 白く

京の如月

緑の卵

うまれたばかりの 卵

凍りつくような地上の濡れ間をぬって  
宙に浮かぶ！

## ◆西日暮里

上野 都

長い影を引く  
初めて行っても影は長い  
登ってゆけば西日暮里三丁目  
さいごの富士見坂。

長い影を引く  
初めて行っても寂しすぎる  
もつと西だというから帰る気も失せ  
補陀落は南の大海原  
流れ 流され  
渡海船が朽ちるまで  
重り石が海溝の底に届くまで。

長い影を引く

始めて行ったら北へ発とうか  
鉄路は一周する山手線  
もつれ合った二十重の電車も  
いずれは三陸の海岸へ  
燃り 燃られ  
セシウムに炙られて  
のっぺらな灰色の畑地に吸い込まれ  
錆びた鉄路は海溝の底へ届いたころか。

長い影を引く  
初めて行ってそれっきり  
数字だけが書かれたお堂の遺骨  
名も無く 身もなく 骨も無く  
数合わせと引き換えに  
錦に包み木箱に収めた苦界の果て  
今となつては  
船にも乗れず  
電車にも乗れず  
白く朽ちゆく小さな仮設に  
茫茫と長い日暮れの三年目  
天井もないプレハブで  
どこへお隠れか 観音菩薩。

## ◆ 裂け開け

有時秀記

水仙の写った鏡が壁に掛かる正方形の部屋。その壁にいまひとつ「森の楽団」と題された水彩画も掛かっている。森の七名の楽団員。その顔には口と目と鼻は描かれていない。時が正午を上げるとき、窓の外で雪が降り始め、しんとした雪音か、あるいは絵のなかの楽団が奏でたのかと錯覚させるような音楽が、かすかに聴こえる。時とともに窓の外は白さがいやましに増し、やがて白魔のように雪が満ちるとき、部屋に夢魔が訪れる。夢魔はひとりの楽団員を絵のなかから連れ出し、水仙の花びらで顔をひとなですると、口と目と鼻がととのい、その顔は中性的な美を体現する。

花のまなこが鏡のなかにみずからの顔の姿をみとめると、顔は徐々にゆがみ、たわみ、ねじれ、そして、すこし裂ける。美術史上にさまざまな描かれた自画像が走馬灯のように過ぎ去ると、その裂け目からやや赤い液体がにじみ出し、いく粒かが、鏡の面を濡らすのだ。とともに、鏡がたわみ、裂けはじめ、寸秒ののち、びりびりと亀裂を起こす。その裂け開けが保たれたままで、鏡は公転運動のように回転しはじめる。部屋のなかをゆつくりと、惑星軌道のように回しはじめる。うにまわる。部屋の中心に見えない太陽があるのか。裂け開けた鏡が軌道をえがき流転する。天井を頂点に、床面を底点に、まわる、まわる、まわる。

裂け開けが底点にくるとき、その裂け目の向こうでは、土が存在を主張する。その裂け開けからみじみでた液体は、土に帰るかに見える。裂け開けから自然の土に帰るのか、という存在の不安を、あるいは諦念と祈りを抱きながらの、にじみだし。

回転した鏡の裂け目が頂点にくると、裂け開けの向こう側は巨大な亀の甲羅のように見え、水晶の輝きに満ちて緑なす山の住み処が見える。伝説の霊亀。そう想える世界へ、裂け開けからにじみでる液体が、玉のじゅずつながらとなって、天井への、頂点への、霊亀への、はしごを通り路に進む。裂け開けそのものが、霊亀への秘の鍵という像を取り結ぶ。霊亀の世界への、玉、玉、玉の参入という像。存在の不安をさかしまにする像の連鎖は、水晶のかがやきを増し、霊亀の山に映える。液体の玉の泉を湧かせる住人があらかじめ故郷とし、霊亀の世界の唯一性を主張しているかのようだ。

永劫か寸秒かのち、雪音が止み、白いしんきろうが滅亡する。ふうつと夢魔が去る。鏡の裂け開けは、しかし、水仙の花に差し込まれた一本のナイフであり、夢魔の立ち去りとともに、裂け開けは消えて、鏡面はキズひとつない。ただ、方丈の部屋の天井には、亀の姿がにじみだした染みがのこされ、絵のなかの楽団員は六名となって、ひとり、逃亡を果たしたかのように、欠けている。

## ◆ それはうたかたの二月

大橋愛由等

ガルバンソー  
ひよこ豆 乾燥されたままでこまでも越境して移動する運命にあるがゆえに風の雫を包摂し寡黙と饒舌を行き交いする

妖精 草葉の陰に潜んでいると思わせながら街角に織りなす影に佇みあまたの教詞をもてあそびながらも待機している

アゴラ 敷き詰められた敷石の数は神々と詩人たちのためぐちの数と同数なのかどうかを付度してみる必要がありそうだ

「オットトトトイ」ガルバンソー  
ひよこ豆がなにかにつまづいたのか根元的に感嘆したのか分らないのだが妖精はもうすぐ全壊する壁の前に立っている理由は魂を休ませるためだとしても二月の不条理を記述する筆記具はあるやなしやと考えていて広場は蒐めよ悲歎も落胆も作為もいずれアルシーヴの混沌の中に棲息するよりほかはなただけキリコの想念のなすがままに描かれるしかないではないかと語りつづけているのだけれど妖精は神が非在の神棚に置かれて乾物が小風にさらされて少しづつ溶解することでだれかがどこかで孕むことになるのか気にしていても数えること蒐めることに執心する広場はアネモネの花言葉をガルバンソー  
ひよこ豆に問われて答えられなかったために冬の間広場で詩人たちが蒔いた氣息を回収することもやめて広場に参集するひとびとに何日も沈黙を強制することになりそのさなかに回廊の影でひとびとの非言を見守っていた妖精にとってはひよこ豆の髪留めが束ねているのは果たして離別の悲しみなのか歓喜なのか日々懊悩するばかりであるのだが後ろ髪からただようハーブの香りこそがその実相であるかもしれないのだ

## ◆窓のある部屋

中堂けいこ

窓わくに手をかけようとすると木の枠がずりりと向こう側に落ちていった。四角い窓はむき出しの空を切り取り痛いほどの光をつめこむがわたしのいる部屋は暗いままだった。落ちた木の枠はいつまでも音を立てず落下し続けている。この部屋は果てしなく上に向う。

その日の夜は山下君の家で家庭教師のくるのを待っていた。三日前から雪が降って外はすっかり根雪ができていた。山下君は府立一中をめざしていた。自分は三中を受けるつもりだった。先生は数学の専門学校の教師をしていた。その日は随分遅くまで待っていたのを覚えていた。山下君の父上が帰宅して「今日は先生はいらっしゃらない。君を家まで送りましょう」と父上は外套も取らずに緊張の面持ちで自分を急ぎ立てた。家は二丁ほどの近さだが雪が深いからと言って父上は玄関から先に立って自分をうながして歩きはじめた。雪はなるほど一尺ほどの深さで足が埋まり所々凍りついて歩きにくかった。途中で小連隊とすれ違った。隊長のような人が自分たちを誰何したので山下さんは立ち止まってなにか言葉かわした。山下さんは内務省のお役人だった。きつと特別な鑑札証を持っているのだから。兵隊も山下さんもひどく緊張してそれが自分にもわかりただ事ではないとわかった。数日前、家には珍しく父が居り、自分を風揚げに連れ出した。

## ◆<sup>デジャブ</sup>既視感の風景

高谷和幸

空間ではなく湿った冷たい靄を、デジャブと呼びならわしてきた。山とか偉人の名を石ころの、名前に付けて、並べた数メートル四方の空間が、いちばんの薄墨色らしきであったから、ぼくの生まれた領土（微小な蜂の巣、下水のにおい、どこにいても同一の片隅、かじりつき、まったく動かさずにはくは生きた）が、これが異なった土地に育てられた、双子のような、「鏡の成長かも」、夜空の薄墨色のあかりを見上げて、デジャブにくぐもつた舌を、濡らすことにもなる。シオマネキがかくれた側溝のうら、排水の落ちるところに、小鮒の魚群、お婆さんのハルさんの、畑の曲がったあぜ道、すっぽりと、からだから抜けてからだに入ら、すべてが点でできている、空間を歩いてみた。歩くからにはぼくは、数メートルのぼくだ。今から400年と少し前に、ヴェインチェンツォ・ガリレイが見た目の高さだ。星は近く、5本の指が入る、手ぶくろの中草のにおいがする。湿った冷たい靄が、石ころを隠し、それを欣喜雀躍というか、欣喜雀躍としか思えない、あなたの、しぼんだ肉のボールをはずませ、夕暮れの街を歩ませる。今まで、オレはどの町にいたのだろう。熱い排気ガス、ボンネットに映る小さなひかり、表面のあからさまに固定した自己から、見てくれの無限に中ぐらいの、思い出せない空間に住んでいる。

ちかくの川の土手でヤッコのや飛行船のやらを飛ばしていたが、昼下がりに上空を軍用機が横切り吹流しのようなものなびかせて飛び去った。父はそれを見ると帰るぞと尻糸を巻き上げさつきと引き上げてしまった。帰るや服を着替え軍令部に登庁してそのまま帰ってこない。

山下さんは雪の道を歩きながら自分に君の父上はしばらくお帰りにならない心配はいらない、しばらくは外へ出てはいけな

いと言った。家では母が待っていた。次の日、こつそり山下君がやってきてこれから溜池まで出てみようと言った。市電の駅は鎖がかかって電車は止まっていた。歩いていくことにした。雪が止んでぬかるむ道を歩いて赤坂見附あたりで物々しい雰囲気になった。尖った丸太を組んだ車止めがあちこちに置いてあって、ライフルを肩にかけた警官がいっぱい居た。陸軍が官邸を封鎖したらしいと山下君は仕入れたばかりの知恵を教えてくださいました。自分はすっかり怖気づいた。戦車が前を通り、人々が手に荷物をいっぱい下げて歩いていった。あちこちの普段は賑やかな店はすっかり品物がなくなり、そこから六本木の学校に向うと避難してきた人でいっぱいだった。自分たちは誰にも気づかれないうように塀や木陰を伝いながら青山の家に帰った。二月二十七日だった。

父はメモ書きにしたが、プリントアウトしてから紛失した。もちろんパソコンにも保存していない。山下さんは仮名で、祖父が風揚げをしたのはもつと戦時が進んでからである。帰宅していないのは事実だ。わたしはメモを読んでいる。

あの日から部屋は空に浮いたままだ。わたしは窓の外に目を凝らすのだが、なにも見えない。どこかで人の声がある。声はしばらく窓のあたりを漂って、向こう側に落ちていった。

## ◆ 帰郷

寺岡良信

みずずかる信濃  
さざなみの志賀

連山を芽吹かせ  
馬が駈ける

わたしの目はもう幻しか見えない  
白鳥が帰郷の支度を始めてみると  
濡標が囁いたのは  
明星の消え残る夜明けだった  
このささやかな星の瞬きにさへ  
人はなぜところが濡れるのだらうか

浅間  
妙高  
木曾

今朝は  
辛夷に似た花がひらく

森を潤すものの優しさが  
雪溪をあつめて  
わたしの毛管を清冽な水脈で満たす

かの世のそらの残寒に

## ◆ パラダイス

富 哲世

パチンコ北斗とパンダ印の  
薬屋の看板のあいだの  
白い二本の支柱の壁に  
神鉄ハイキングと書かれた  
森林公園の写真広告がある  
まばらな過客の往来する

これは悪夢の風景  
かもしれない

ゆうべ蟹缶を開ける幻を見ながら眠りに落ちた  
寝釈迦の夢のなかに  
いつわりの世界は目覚めて音符のような  
ソラの足音が近づいて来る  
それが空無の足音であると  
気づいているような気もするし  
生まれて出合った  
親しい誰かの靴音に違いない気もする

ここはささやきの岸  
アコガレをつかむように

仏足の指が空をつかんでぐうばあしている  
花のテールブルクロスの上の

カットガラスのキャンディーキャニスターが日を浴びて  
どうしよう、と考えている  
浴びて



まま母口説を歌った時山会のみなさん

## 〈口説〉に見出す 徳之島の歌の魅力

神戸市長田区で行われた第七回徳之島一切節大会に出向く(三月二日(日))。この大会は毎回私に刺激を与えてくれる。今回の収穫を二つ紹介しておく。そのひとつ目。望月孝雄氏があらたに豎琴に挑戦していた。この楽器は盲目のウタシヤである里国隆がかつて演奏し、その楽曲はC

Dに残こされているので強烈な印象がある。また現役ウタシヤでは阿世知幸雄さんが演奏している。豎琴は三線で奏でる同じ旋律を奏でることが多いのだが、演奏する人は少ない。奄美独自の豎琴があると言われているが、はつきりしたことはわからない。また、どちらかというとカサン系のウタシヤが好んで用いる楽器と思われる。望月さんは「先輩ウタシヤが演奏してきたこの豎琴を奄美シマウタ表現する楽器のひとつとして継承していきたい」と心強く語っていた。今はまだ奏法など手探りであるが、その挑戦する心意気に拍手を送りたい。

ふたつめは、徳之島町亀津出身の時山実氏のうたである。舞台では、しまった教室「時山会」のみなさんによる「まま母口説」が披露された。わたしはこの一曲を聴きたいがために大会にかけつけたといつてもいいだろう。

徳之島は奄美群島の中でも飛び抜けて口説と田植唄が継承されている稀有な島である。どうしてこの島に口説が多く継承されているのか、それを解き明かした研究論考にまだ巡り合っていない。素人の私見から云わしてもらおうと、口説の持つ叙事詩的世界が、この徳之島の島民体質にびつたりはまっているからではないだろうかとも思うのだが、これだけでは十分な説明になっていないことは分かっている。つまり、奄美大島より徳之島の人たちのほうが社会や文化に物語性(抒情性)を希求しているからではないだろうか。この件についてはもう少し追究していきたい。

さてその「まま母口説」であるが、私はかつて徳之島町山集落出身の坂元武広さんの「まんま口説」をFMわいわいCDライブラリーの一枚として収録させてもらったことがある。歌詞を比べてみると多くの箇所が異なっていて、一つの島の中でも、多様な歌詞があることが発見できる。しかしおおよその歌詞内容は次のように要約することができる。

(幼いころ死に別れた母を慕って、母を探してみるのだが、母を知っている人に巡り会えない(≡手形はみつかるけど足形は見つからない)。仕方なく家に戻ってはみても継母がいじわるをする。それからまた泣く泣く母を探し求めていると老人に出会い、石んぞ、金んぞ(あるいは、石所、金所。いずれも墓所の意味)に行きなさいという。言ってみれば母とようやく出会えた。一緒に帰ろうと促すのだが、母は死んでしまつて身体は元通りにならないから諦めなさい、早く家に帰りなさいと言われ、仕方なく家に戻つていく)

この「まんま口説」はなぜか歌い終わつた後に、「まんかいざし」を歌うこととなっているのだと云う。

この曲をすべて歌うと一〇分近くかかるのだが、時山さん自身早く母親をなくしているので、この口説はまるで自分のことのようなので、歌いながらも心の中では泣いているのだそうだ。徳之島の人たちの琴線に触れる曲なのであ

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.90

めらんじゅ

2014年03月23日 通巻90号  
発行所/月刊『Mélange』編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F  
編集・発行人/大橋愛由等(『Mélange』同人)  
Mobile 090-5069-1840  
maroad66454@gmail.com  
定価 500円(税込)